（別紙２）
論文審査の結果の要旨

氏名：佐藤健太郎（さとう　けんたろう）

論文「13〜15 世紀マグリブ・アンダルスにおける預言者生誕祭」は、13 世紀にマグリブ西端の町セウタに出現し、以後マグリブ・アンダルス各地域に広まっていった預言者生誕祭（マウリド・アンナビー）について、詳しく論じている。筆者が掲げる本論文の主要な課題は、生誕祭出現の経緯を検討するとともに、13 世紀後半にはじまる宮廷での預言者生誕祭が、支配者の威光を公に示すことによって、政権の安定化にも利用されていたことを、アラビア語史料を用いて実証的に明らかにすることである。

第１章では、預言者生誕祭を提唱したセウタのアザフィー父子による『連ねられた真珠』を検討し、この執筆意図がキリスト教徒の脅威に対抗してムスリム独自の祭を提唱することにあったことを明らかにした。第２章では、アザフィー家の半独立政権、滅亡間近のムワッヒド朝、勃興期のマリーン朝を事例として、国家行事としての預言者生誕祭が、スーフィー的な要素を取り入れて華やかに行われ、それらの挙行には統治理念強化の期待が込められていたことを実証した。つづく第３章では、マリーン朝宮廷で挙行された預言者生誕祭の演出法が、北アフリカ、中部マグリブ、アンダルスなどの諸地域で採用され、どの宮廷でも音・光・香による演出や預言者生誕賛歌による君主と預言者双方への賛辞などの共通の要素が見られたことを多彩に論じている。最後の第４章では、このような預言者生誕祭の挙行を法学者たちがどのように受け止めていたのかを、「ファトワー（法的意見）集」を手がかりにして分析する。これを批判する者は、スーフィーたちによる華美な演出と男女の同席を問題とし、逆にこれを擁護する者は、男女の同席さえ排除すれば、生誕祭は有意義な祭礼となることを主張していたと結論する。

以上は、同時代のアラビア語史料を綿密に分析・整理して得られた手堅い結論であり、イスラーム史における祭礼と王権の関係を考える上でも、今後参考にすべき重要な論点をいくつも提示している。ただ、マグリブ地方に預言者生誕祭が出現するに際し、東方イスラーム世界からの影響があったのかどうか、また各章間の議論をさらに有機的に展開させるべきではないか、など今後研究を深めるべき余地は残されている。しかし、手稿本を含むアラビア語史料を駆使して、各地の宮廷における生誕祭の挙行と王権との関係を具体的に明らかにしたことは貴重な成果であり、博士（文学）論文として十分な評価に値する。